

風のみち

希望は永遠の命 映画 『ショーシャンクの空に』

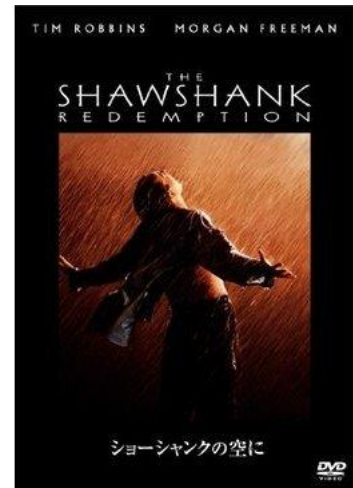
アメリカ、メイン州（アメリカ合衆国の最東端にある州）。1947年。若くして銀行の副頭取にのぼりつめているアンディ・デュフレーションは、無実の罪で（冤罪）でありながら、ショーシャンク刑務所に送られます…。そのショーシャンク刑務所には、終身刑の者ばかりが集められていました。みんな、一癖も二癖もありそうな人物ばかりです。

レッドという中年の黒人男性は殺人罪で終身刑に処され、服役20年目に突入していました。仮釈放を得たいレッドは、保護観察官との仮面接で模範解答を並べますが、それがかえって反省の意がないと受け取られて不可にされます。

レッド自身も仮釈放を本心から望んでいるかということ、そうでもありませんでした。刑務所生活が長く、レッドは刑務所での調達係を請け負っていますから、生活に不満を持っていません。ショーシャンク刑務所内での過度な暴力は、当時は当然のように行なわれていました。アンディは入所当時、誰にも心を開きませんでした。ひとりで行動し、ひとりで食事します。しかしアンディは一か月経過した頃に、やっと口を開きました。初めてアンディが声をかけた相手は、調達係のレッドです。アンディはレッドにロックハンマーを希望しました。鋤物マニアの趣味を復活させたいアンディは、レッドに頼みます。外部に連絡を取ってロックハンマーを取り寄せたレッドは、そのハンマーを図書の本を配る老囚人・ブルックスに頼み、図書にまぎれてハンマーをアンディに渡します。

それがきっかけで、アンディはレッドと話をするようになりました。アンディも、レッドには心を許している節がありました。

1949年春に、ショーシャンク刑務所に仕事が舞い込みました。工場の屋根を修理するという、外部での作業です。外での作業は珍しいので、12人の人手に対し100人以上が志願しました。レッドは刑務官に賄賂を渡し、自分と仲間たちを入れるように手配します。そこにアンディも加えました。刑務官の監視の目がありつつの作業ですが、久しぶりに日差しを浴びての肉体労働は楽しく、レッドたちは喜びます。その時、ハドレー刑務



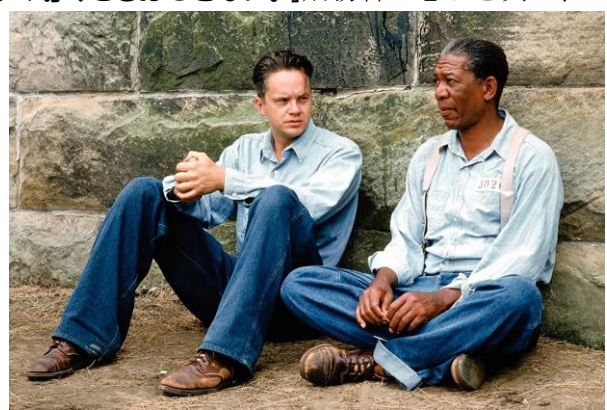
主任という乱暴な男が他の同僚に愚痴を洩らしているのを、アンディが聞きつけました。ハドレーの兄が100万ドル（約1億1500万円）の遺産を残して死に、3万5000ドル（約402万円）をハドレーが相続することになったのですが、相続税がかかるので実際に手にする金額は微々たるものだということです。それを聞いていたアンディがハドレーに近寄ると、「奥さんを信じていますか？ 裏切られる心配は？」と質問します。一介の囚人が話に加わってきたので、ハドレーは気を悪くしますが、アンディは怯まずに「その3万5000ドルを奥さんに贈与すればいい」と言います。さらに「6万ドルまでは非課税で税金を取られない。合法的だ。もし不審に思うなら国税庁に問い合わせればよい」と言い、アンディがすらすら述べるので、ハドレーは耳を傾けます。優秀な銀行員だけあって、アンディは法の抜け道にも通じていました。アンディは「贈与にあたっては弁護士の書類が必要だ。その書類も用紙があれば自分ができる」と言います。「代わりにもし成功したら、仲間にビールをおごってくれ」と付け足しました。ハドレーの相続問題は解決します。アンディとの約束が果たされ、作業仲間のレッドたちはビールにありつきしました。作業の手を止めて屋上で飲むビールは最高です。当のアンディはというと「酒はやめた」と言ってビールを飲みません。欲のために動いたわけではないと一同は知り、囚人にも刑務官にも好印象を与えます。そして結果的にこの出来事により、アンディは税制処理、資産運用、とにかく金に関することならプロだという印象を、刑務官たちに強く植え付けました。アンディは媚びたわけではありません。なごやかな空間とやすらぎの時間を求めただけだと、レッドは思いました。アンディとレッドはますます親しくなります。アンディはチェスの駒を作るために石を欲しがりましたが、それは難しい問題でした。何をして投獄されたのかとアンディに聞いたレッドは「殺人罪だけど、無実だ」と聞きます。しかしこの刑務所では、誰もが「無実だ」と言うのが常で、レッドも信じていませんでした。その後、アンディは所長に呼ばれ、図書係に配置換えになりました。図書を配る老囚人のブルックスは、1905年に入所して、1921年からずっと本を配っていました。しかしその図書係というのは表向きの名目です。図書の部屋に詰めるアンディのところへは、刑務官・ディーキンズが「子どもの養育費のための信託資金を作りたい」と言って貯蓄計画のアドバイスを乞います。そのように、所長や刑務官たちの税務処理を行うようになったのです。アンディは所長に、図書を増やす予算要請の手紙を州議会に出してもいいかと聞き、許可をもらって以降、毎週出し続けました。税申告の時期には手伝いとしてレッドも駆り出され、肉体労働ではなくデスクワークで、楽をさせてもらいます。その後、老囚人・ブルックスの仮釈放が決まりました。しかしブルックスは喜ぶどころか、祝福する仲間・ヘイウッドに怒りの刃をぶつけます。50年以上もずっと刑務所で暮らしてきたブルックスにとっては、外の世界が怖いのです。刑務所の壁は囚人たちにとって、最初は憎むべきものですが、次第に慣れ、最終的には壁に頼る存在でした。ヒナから育てていたカラスと別れたブルックスは、仮釈放の手続きを経て外の世界に出ます。入所の頃には自動車なんて1台見るかどうかでしたが、外に出ると自動車がわんさか走っていました。街を歩く人はみな足早で、時代に残されたブルックスは強い疎外感を味わいます。仮釈放委員会に住む場所と仕事を提供されたブルックスですが、「外の世界はつらいから自殺する」と囚人仲間に手紙を書き送り、そのとおり部屋で首を吊って自殺しました。壁に「ブルックス ここにありき」と書き残して。ブルックスの手紙を読んだレッドにとっては他人事ではありません。レッドだけでなく他の者もそうです。刑務所に入っていた時期が長ければ長いほど、外に出た時の孤独感が尋常ではないことを悟ります。その頃アンディに州議会から手紙が届きました。週に1回の手紙に辟易した州議会は、図書室用の予算として200ドル（約2万3000円）の小切手と、中古図書を送ってきました。州議会としては「これで勘弁しろ」のつもりだったのですが、アンディは「6年間で望みがかなえられた。次からは週に2通手紙を送る」と俄然意欲をかきたてられます。中古図書に『フィガロの結婚』のレコードが入っているのを見つけたアンディは、放送室にたてこもってレコードの曲を流します。教養がなく曲名を知らない者たちも、その美しいオペラ曲のメロディにつかの間、自由を味わいました。

所長は怒ってアンディを2週間の懲罰房に入れます。懲罰房は暗くて孤独との戦いを強いられる、他人との接点が全くない場所ですが、アンディは懲罰房の中で「心の中で音楽を聞いていた」とレッドに言い、希望は捨てたくないと言います。そんなアンディにレッドは「希望は正気を失わせる」と警告しました。希望を持ち続けたいアンディと、希望を持ちたくないレッド…この点だけ、2人は意見が対立します。懲役30年が経過したレッドは、また仮釈放不可になりました。アンディはレッドに残念賞と言い、ハーモニカをプレゼントします。1959年、州議会はアンディの手紙に根負けし、500ドルの予算に引き上げました。アンディは格安な本や売れ残りの本を買い、図書館を作ります。ショーシャンク刑務所に図書館ができたというのは、新聞にも取り上げられ、福利厚生や社会復帰を促す活動として、ノートン所長のボランティア精神の現れのように取られました。ノートン所長は、ちゃっかり自分の手柄のようにして振る舞います。そのノートン所長の財テクをアンディはずっと行ないました。会計係として金の管理、税金を抜かれないよう、アンディは架空の人物ランドール・スティープンスという人物を作りだし、その口座に金を蓄えます。書類上の人物ですが、念のため所長を通じて身分証や免許証なども偽造させました。アンディは図書館を作ると共に、囚人に勉強をさせて高卒資格を取らせる活動も始めました。1965年に、劇的な出来事が起こります。トミーという若い男性囚人が入所してきたのです。ここから話は急展開です。あとは見てのお楽しみ。

レッド（ナレーション）「いまでも、俺はこの2人のイタリア人の女が何のことを歌っていたのか知らないし、知りたいとも思わない。知らない方がいいこともある。言葉では表現できないような美しいことについて歌っており、それゆえに心を締めつけるのだと思いたい。歌声は、高く遠く舞い上がった。まるで美しい鳥がオリの中に飛んできて、塀を消し去ってくれたかのようなようだった。その短い間、ショーシャンクの全員が自由を感じていた」

Red: I have no idea to this day what those two Italian ladies were singing about. Truth is, I don't want to know. Some things are best left unsaid. I'd like to think they were singing about something so beautiful, it can't be expressed in words, and makes your heart ache because of it. I tell you, those voices soared higher and farther than anybody in a gray place dares to dream. It was like some beautiful bird flapped into our drab little cage and made those walls dissolve away, and for the briefest of moments, every last man in Shawshank felt free.

これは、アンディが放送室を占領してモーツァルトも「フィガロの結婚」というオペラの「手紙の二重唱」という曲がショーシャンク刑務所に流れる時のレッドの言葉です。映画の中でも得に印象的な場面。「その短い間、ショーシャンクの全員が自由を感じていた。」囚人たちは刑務所から流れる音楽に耳を傾け、つかの間の自由を感じるのです。この行動の結果、アンディは罰を受けることになるのですが、そこまでしてでも囚人たちに音楽の素晴らしさ、自由の素晴らしさを伝えたかったのでしょう。音楽とは無縁の生活を送っていた囚人たちにとってこの行動は大きな意味を持ったはずです。「**音楽は決して人から奪えないそう思わないか？心の豊かさを失っちゃダメだ。人間の心は石でできてるわけじゃない。心の中には何かある。誰も奪えないあるものが。希望だよ。**」「**脳と心で聴いていた。音楽は決して人から奪うことはできない。**」刑務官の怒りを買って、窓一つない独房に入れられてしまうアンディ。そんな独房から出たときに仲の良い囚人から独房での生活を問われると、彼は音楽を聴いていたと答える。蓄音機のない独房でどのよ



うに音楽を聴いていたのか不思議に思う仲間に語ったのが今回紹介するこのセリフ。独房という劣悪な環境では精神的にも参ってしまうと思います。しかし、そんなつらい環境の中でも、心の中の音楽を支えに懸命に生きていく彼の姿からは、独房からの解放という希望を捨てずに耐え抜く信念の強さが伺えます。

今、私たちは同じ境遇におかれています。まさに鳥かごの中の鳥と同じ。いつ自由になれるのか。また自由になってもそれは本当に幸せをもたらすのか、誰もが希望を失いかけても不思議ではない世界に投げ込まれています。しかし、どんな時でも希望を失ってはいけないと思うのです。現状打開のために必死に動いている人たちが沢山います。その人たちは私たちに勇気ともう一つ「希望」を与えます。

「希望はいいものだ。多分最高のものだ。素晴らしいものは決して滅びない。」

“希望は永遠の命” この冒頭の言葉は映画を最後まで見た人にしかわからない言葉です。ネタバレをすれば、アンディがレッドにあてた手紙の中にある言葉です。

「ワクワクして落ち着かない 自由な人間の喜びだ。この長旅の結末はまだわからない国境を越せるといいが、親友と再会できるといいが。太平洋が青く美しいといいが俺の希望だ。」この映画の最後の言葉です。後半の3分の1の重要なキーワードが手紙です。

先のモーツァルトの二重奏も「手紙の二重唱」です。その手紙にも希望が語られています。人生は予想外のことが沢山起きます。その時に私たちを救うのはパンドラの箱にたった一つ残されたともいわれる「希望」です。どんな辛い現実の中でも、色々なものを失っても希望は残るのです。失ったものを嘆くよりは、残されたものを大切にする時、希望を失わず生きていく時に、人は奇跡に出会えるのかもしれません。

「ショーシャンクの空に」は『希望』が人生にとっていかに大切なものであるかをすごく感じさせてくれる感動的な映画です。

君たちは、今、離れ離れになって分断されているかに見えます。この後、登校しても昨年とは違う環境にとまどいを感じ、昨年と違う状況に不満や、やり場のない怒りさえも覚えるかもしれません。その怒りはこれから生きていく時のエネルギーに転換しなさい。もう一度言います。失われたものを嘆くより残されたものを大切にしなさい。そして離ればなれになった今こそ、見えない絆を信じなさい。

君が空を見ている時、同じ空を見上げている（合唱曲「この地球のどこかで」と同じ）人がいることを信じなさい。そうすれば君は決して孤独ではないのです。「ショーシャンクの空に」に登場するモーツァルトの音楽で人々はみな空を眺めます。きっとその人たちは置かれた境遇、その先にある希望を眺めていたのかもしれません。空を見上げる時、そこには必ず希望があるのです。この閉塞状況の先にある未来や奇跡を信じるのが今を充実させたものになるのです。希望を持ち、勇気をもってください。再会を楽しみにしています。

